研究プロジェクト名

テクスト科学・史料学・マイクロヒストリー —ポスト・ローマ期国家構造研究の新地平—

TYPE I

Text Science, Documentology and Microhistory. A New Horizon on the Study of the State Structure in Post-Roman Era.

文学研究科・教授
佐藤彰一
Shoichi Sato

さとう しょういち プロフィール

1968年　中央大学法学部法律学科　卒業
1969年　カン大学（フランス）留学
1973年　早稲田大学大学院修士課程　修了
1995年　博士（文学）取得　早稲田大学

研究経歴

1978年　日本学術振興会　奨励研究員
1979年　愛知大学法経学部　助教授
1984年　パリ第十大学　客員研究員
1987年　名古屋大学文学部　助教授
1991年　名古屋大学文学部　教授
1995年　フランス政府研究庁（CNRS）研究員
2000年～　名古屋大学文学研究科　教授

研究分野

後期古代の社会と宗教、ポスト・ローマ期の行政・統治文書、メロヴィング期の国制・社会・経済、メロヴィング国家の政治構造、中世初期トゥール地方の所領構造、ポスト・ローマ期のイングランドと大陸の宗教・文化交流、ポスト・ローマ期ガリアの地帯構造、サン・マルタン修道院史、紀元千年以前の世界システム。

受賞歴、レクチャーシップなど

2001年　コレージュ・ド・フランス講義
2001年　社会科学高等研究院講義
2001年　ソルボンヌ高等研究院講義
2002年　プリンストン大学講演
2002年　日本学士院賞

私は学部教育として法律学を学び、その後に大学院で西洋中世史専攻に転じた。法律学を学び裁判の傍聴などを体験するなかで、国家の歴史的意味について深く考えさせられたのが専攻を変える契機であった。大学院修士課程に入るとすぐに2年間ほどフランスに留学したが、留学先のノルマンディーにあるカン大学の人文学部には、古代史から近代史にいたるまで、今振り返って見てこの時なぜこれほどの陣容がフランスの地方大学で整えられたか不思議な思いがするほど、超一流の教授が名を連ねていた。古代史にはビザンツ学のE・パトラジャン、中世史は民族移動期期史の権威L・ミュッセ、近代史講座には大航海時代の専門家で、若干35歳で3500頁にも及ぶ学位論文を公刊し伝説的存在のP・ショニュ教授がいた。とくにショニュ教授の「諸君、今日はクリストフ・コロンブスがどのようにして大西洋を渡ったかを説明しよう」と切り出して、当時の船舶構造、航海術、潮流についての知識などをノートを参照することもなく滔々と語るさまは、まことに目の眩むおもいで、深い知的衝撃を受けた。これら綺羅星のような教授陣の講義に日々接するなかで、到達すべき学問的水準がひとつの規範として自分の内奥に構築されたように思う。

国家の歴史的位相の探究という関心から、近代国家の淵源であるヨーロッパ中世の国家論をテーマに設定して研究を続けてきたが、この間に発表した諸論文のなかで、後期古代から中世揺籃期の国家について考察した論考を、2000年に『ポスト・ローマ期フランク史の研究』（岩波書店）として一著に纏めた。また同じ頃に国家を構成する諸地域の構造を、地域史の観点から研究した諸論文を『フランス中世初期地域史の研究（仮題）』として2003年中の刊行を予定している。時間的に前後するが、1984年から86年にかけてパリで研究をおこなっていた折に手がけた、ロワール川沿いのフランスの古都トゥールにあるサン・マルタン修道院に伝来した7世紀末の会計記録断片を分析した『修道院と農民—会計文書から見た中世形成期ロワール地方—』（名古屋大学出版会、1997年）は、2002年度に日本学士院賞を受賞した。

他方これまで重ねてきた欧米学界との研究交流、主要な成果の仏文、英文による発信にもよるのであろうが、2001年にはフランス大学世界の殿堂であるコレージュ・ド・フランスや社会科学高等研究院（ESESS）、ソルボンヌ高等研究院（EPHE）、プロヴァンス第1大学などに招聘教授として招かれ連続講義を、また2002年にはプリンストン大学で講演を行なった。

1984年に外国人会員に選出されたフランス国立歴史考古学会（Société Nationale des Antiquaires de France）は、毎月一回の研究発表がルーブル宮の中にあるロココ調の調度で整えられたホールで開かれるが、長期滞在や短期間の出張の折に日程が会えば必ず出席することにしている。いかにも19世紀的な光景であるが、そこには人間のアイデンティティ追究の学たる人文科学が、時代から一定の距離をおくことによって捉えうる貴重なものが棲まっているように思われるからである。

本学高等研究院の流動研究教官に選ばれたことはまことに光栄であり、院長はじめ関係各位に感謝を表したい。研究課題「テクスト科学・史料学・マイクロヒストリー—ポスト・ローマ期国家構造研究の新地平—」は、一言で云えばこれまで一貫して追究してきたメロヴィング・フランク国家論に関する、内外学界のこれまでの研究を一新する意図をもった総合化の試みである。従来のこの時代、あるいはこの時代の社会や国家についてのイメージは、古代から中世への移行期としてなんら積極的な意義をもたない過渡的な相のもとにとらえられてきた。だが、これまで専らこの時代に焦点を当ててきた研究の蓄積に立って、それは大きな誤解であり、この時代を正確に理解することは、ヨーロッパ史の歴史像を全く異なる構図として捉え直す学問的ポテンシャルをはらんでいると考えるにいたった。時代区分の再検討とも深く関わるこのような問題観は、ひいては現代というものの歴史のなかでの位置をあらためて見直すことを余儀なくさせるのである。

歴史研究のアルファでありオメガである史料をどのように読み解き歴史イメージを肉づけするかが、歴史家の能力と技量が試されるところであるが、この時代について史料状況はきわめてトリッキーである。トゥール司教グレゴリウスという6世紀末の人物が書き残した『歴史十書』と題する、驚くほど精細かつ浩瀚な歴史記述がある一方で、それ以外の記録、文書類の存在は渺々たるありさまである。つまりわれわれ1400年後の歴史家は、グレゴリウスという一人物ががそのようなものとして提示し描写してみせた時代相から自由になることは至難の業なのである。いかにして「グレゴリウスの呪縛」から解放されるかが、この分野の最重要の学問的課題であるといってよい。課題のなかで「テクスト科学、史料学、マイクロヒストリー」として、いささか執拗に歴史テクストの解釈技法に関わるタームを前面に掲げたのは、そうした意図による。フランスや米国での一連の講義や講演の主題の多くは、グレゴリウスの新解釈に関わるものであり、その機会に新しいメロヴィング国家論の総合化を求められた。本研究課題として謳ったフランス語による一書の公刊には、こうした事情が背景としてある。

世界の並みいる「高等研究院」のなかでも、おそらくプリンストン大学のそれはアインシュタインのオーラもあって、一等群を抜いた知名度をもつものであろう。人文科学の分野でもカントロヴィッツ、パノフスキーなどスーパー級の学者が名を連ねていた。高々と聳える稜線であるが、何にでも第一歩はある。名古屋大学高等研究院がその峰に向かって着実に歩みを進めることを願うとともに、第一世代の流動研究教官としての役割の重さを痛感している。